

# 『生理学テキスト 第8版』

(第1刷～第3刷)

## 正誤表

本書におきまして、下記の通り記載内容に誤りがございました。訂正してお詫びいたします。

●p.267 上から17～21行目

(誤)  $K_{ATP}$  チャンネルは、内向き整流性 K チャンネル (心筋は Kir6.2) とスルホニルウレア薬の ピナシジル を結合するスルホニルウレア受容体 (心筋 SUR2A) の複合体である。心筋以外にも  $I_{K,ATP}$  チャンネルは膵臓の B ( $\beta$ ) 細胞におけるインスリンの放出の抑制に関係する (図 17-31 参照)。 ピナシジル は  $I_{K,ATP}$  を抑制してインスリンの放出を増加する。

(正)  $K_{ATP}$  チャンネルは、内向き整流性 K チャンネル (心筋は Kir6.2) とスルホニルウレア薬の グリベンクラミド を結合するスルホニルウレア受容体 (心筋 SUR2A) の複合体である。心筋以外にも  $I_{K,ATP}$  チャンネルは膵臓の B ( $\beta$ ) 細胞におけるインスリンの放出の抑制に関係する (図 17-31 参照)。 グリベンクラミド は  $I_{K,ATP}$  を抑制してインスリンの放出を増加する。

●p.377 上から1～3行目

(誤) 下唾液核からは、副交感神経の顔面神経 (VII) が顎下神経節に達し、節後線維が顎下腺および舌下腺を支配する。 上唾液核からは副交感神経の舌咽神経 (IX) が耳神経節に達し耳下腺を支配する。

(正) 上唾液核からは、副交感神経の顔面神経 (VII) が顎下神経節に達し、節後線維が顎下腺および舌下腺を支配する。 下唾液核からは副交感神経の舌咽神経 (IX) が耳神経節に達し耳下腺を支配する。

# 『生理学テキスト 第8版』

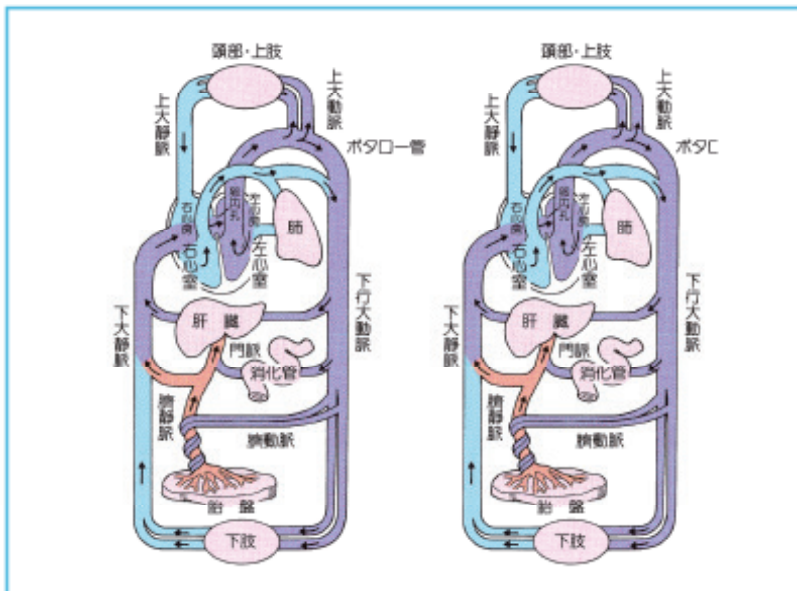
(第1刷～第2刷)

## 正誤表

本書におきまして、下記の通り記載内容に誤りがございました。訂正してお詫びいたします。

●p.453 図18-10

(誤)



(正)

